

当院におけるパーキンソン病センターのあゆみと将来について

近藤 詩穂 Shiho Kondo	久松 沙彩 Saaya Hisamatsu	室井 祥恵 Sakie Muroi	常楽 美晴 Miharu Joraku
佐藤 亜美 Ami Sato	黒木裕美江 Yumie Kuroki	大塚 央子 Hisako Otsuka	木村 隆 Takashi Kimura

NHO 旭川医療センター 3階病棟

1. 概要

パーキンソン病（以下PD）患者は年々増加傾向にあり、治療も多様化してきている。患者や家族が病状の進行過程や薬の効果、副作用について理解し、治療の選択をしていく必要がある。そこで、患者への情報提供、患者・家族が適切な治療法を選択出来ることを目的とし、平成14年度よりPD教室を開催している。その後、組織的、系統的な取り組みが必要とされ、平成21年度にPDセンターを発足した。当センターの目的は、PDの最新治療の実施、最新の技術を利用した診断、患者一人一人に適したテーラーメイド治療、PDに関する情報提供を行うことである。PD教室やPD市民公開教室、PDクリティカルパスの運用や朝昼タンパク質分配調整食（PD食）などの様々な取り組みを行い、PDに対する理解を深められるよう取り組んでいる。今後の課題も含めPDセンターの活動内容を報告する。

2. 当院におけるPDセンターの取り組み

1) PD教室（表1・図1参照）

対象はPD患者とその家族。

毎月第3金曜日、午後3時～4時30分に院内にて実施している。

年間10回開催しており、平成28年2月の開催で148回目を迎えた。

PD教室の1回の平均参加人数は、平成25年度は19.3名、平成26年度は23.8名、平成27年度は、平成28年2月まで23.5名と年々増加傾向にある。

①講義

平成14年より医師の運営を中心に、医師とコメディカルによる講義を1時間実施していたが、平成25年度より運営の中心に看護師が加わり、音楽療法と患者同士の交流会を取り入れた。そのため、医師・コメディカルによる講義を30分へ短縮し、音楽療法と患者同士の交流会を30分ずつ実施している。

講義内容としては、病気との付き合い方について、話すことと食事について、利用できる制度、リハビリからみた工夫、PD治療薬について、薬の効果と食事の関係など多岐にわたる。

②音楽療法

PDでは一定のリズムの動作が困難となり、歩行している途中で小走りになったり、動作がとれなくなってしまうことがある。音楽療法は、音楽のリズムに合わせて体を動かすことで脳に一定のリズムで刺激を与

表1 PD教室取り組み内容

以前	現在
対象:パーキンソン病患者とその家族	
毎月第3金曜日 15時00分～16時00分	毎月第3金曜日 15時00分～16時30分
医師講演 30分 コメディカル講演 30分 (看護師・リハビリスタッフ・メディカルソーシャルワーカー・薬剤師・管理栄養士)	医師講演 15分 コメディカル講演 15分 (看護師・リハビリスタッフ・メディカルソーシャルワーカー・薬剤師・管理栄養士)
	音楽療法 30分 パーキンソン病交流会 30分
●講演内容 パーキンソン病について・病気との付き合い方について・話すことと食べることについて・利用できる制度・リハビリからみた工夫・パーキンソン病治療薬について・薬の効果と食事の関係等。	

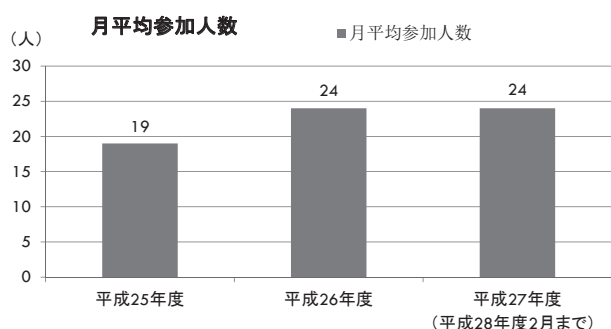


図1 PD教室参加人数

え、体が動きやすくなる効果が期待される。また、音楽に合わせて歌や楽器演奏をすることで精神的にリフレッシュすることができる。これらの効果を有する音楽療養は、PDの非薬物療法として非常に有効であると考えられる。そのため、北海道医療大学准教授で音楽療法士の近藤里美氏をお招きし、平成25年9月より音楽に合わせた歩行や歌・楽器演奏といった音楽療法を導入した。

しかし、音楽療養の効果としてインタビュー形式で一時的に動きやすくなったなどの意見があるが、本人の話と期待される効果が一致しているかについては検討できていないため、今後調査を継続していく予定である。

④交流会

北海道医療大学准教授の佐々木栄子氏は、北海道札幌市にてPD患者会を開催している。その患者会では、一つのテーマに沿って患者同士が語り合う場が設けられていた。そこには、患者同士が日常生活の不安や工夫点など全員が発言できる場が設けられていた。また、PD患者会の意義について検討されている佐々木

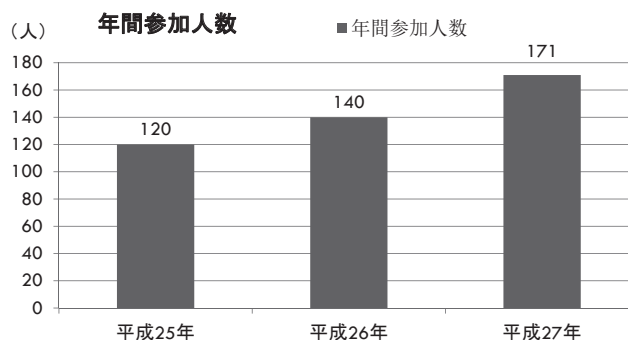


図2 市民公開教室参加人数

准教授は、「神経難病患者の心理的援助はQOLの維持・向上に欠かせないものであり、その手段として同じ疾患をかかえている者同士が、その病気について語り合う援助プログラムの必要性が示唆されている。」と述べている。当院でも患者同士の不安や悩みについて相談または共有できる場を提供したいと考え、平成25年6月より交流会を導入した。

交流会の方法として、7~8人のグループを作り、歩行や睡眠・便秘や食事などテーマの一つあげ、それに対し全員が発言できるよう調整し、看護師は司会・進行を務めている。

2) パーキンソン病市民公開教室 (図2参照)

対象はPD患者とその家族、PDに興味のある方としている。

PD市民公開教室は年1回院外にて開催している。

院内スタッフのみならず、院外より脳外科医師や音楽療法士を講師として招き、PDの最新の治療や情報について提供して頂いている。

PD市民公開教室の参加人数は、平成25年120名、平成26年140名、平成27年171名と年々増加傾向にある。

3) PDクリティカルパス (表2・3参照)

患者が円滑に治療を受けられ、安心して入院生活を送れることを目的とし、入院時にPDクリティカルパスを導入している。PDパスは、PD精査パス(1週間・2週間)、PD薬物調整・リハビリパス(2週間)がある。

PD精査パス(1週間・2週間)は平成25年度77件、平成26年度71件、平成27年度8月までは54件となっており、PDリハビリ & 薬物調整パスは平成25年度123件、平成26年度124件、平成27年度2月まで

